

恋愛台風5

S u z u e T a k e o

十和田 眞

Makoto Towada



エタニティ文庫

目次

恋愛台風 5	5
五十年後のあなたへ	291
いつまで経っても愛しい子	311

恋愛台風5

1

心の奥底に沈め続けたもの、感情の裏に隠し続けたもの。それに気づいたら崩れ落ち
 そうで、知らぬふりを続けてきた。

だけでもう、そうやって逃げるのは終わりにしなければいけないのかもしれない。

「それじゃあ、お先に失礼します」

街灯が街を照らす頃、キリの良いところまで仕事を終えた鈴はバッグを手に立ち上
 がった。隣に座っていた先輩社員である白戸井実も、薄闇がかかった窓の外を見て、「も
 うそんな時間か？」と慌て出す。

教育教材全般を取り扱う有名企業に勤める鈴は、その中でも花形部署である営業部に
 所属している。しかし、それにうぬぼれる事なく、マイペースに高齢者教材の顧客開拓
 に励んでいた。

「やる事が多いと、時間が過ぎるのが早いですよね」

「だよなあ。年食ったせいか、余計にそう感じるよ」

「あー、わかります」

「気付いたらジーさんになってるかもな」

白戸井は軽く笑って片付けを始めた。三十路前にしてすでに三児の父であり、子煩悩
 な白戸井は、帰ってやらなければいけない事がたくさんあるのだろう。思わず、彼のデ
 スクに飾られている家族写真を盗み見る。まぶしい程に幸せそうな家族の姿がそこに
 あった。

「あ、ごめん、俺の事は気にしなくて良いから行って、行って」

「でも」

「待っててもらおうと、むしろ焦るから！」

先に帰るのは心苦しく、立ち止まっていると、気にする事はないと白戸井に言われる。
 焦るからと理由を付けてはいるが、鈴を気遣ってくれたのだろう。これ以上余計な気
 を遣わせてはいけないと、鈴はべこりと頭を下げて足を踏み出す。

しかし、彼のうしろを通り過ぎ、フロアの出入り口へ向かった鈴に白戸井がふいにこ
 う言った。

「原田、髪伸びたよな」

ふたたび足を止めて振り返ると、白戸井は、

「ちょっと前から思ってたんだけど」

と言いつつ、自分の顔の脇で手を上下に振っている。鈴の長い髪を表現しているつもりらしい。普段はアップにしている事が多いが、今日は珍しく下ろしていたのでなおさる気になったのだろう。

鈴は自分の茶色の髪を一房掴んで引っ張った。白戸井が言うように、鈴のふわふわの髪はすでに腰までの長さになっている。

「そうなんです、大分伸びたんですよね」

「切んないの？ そんだけ長いと色々大変だろ？」

「髪を洗うのも乾かすのも、時間がかかりますね」

「だろうなあ」

男性には、髪にそれだけの手間をかける女性の心理が理解できないのかもしれない。不思議そうな眼差しで、鈴の髪を見ている。

「あ、ごめん、似合わないか思ってる訳じゃなくて！」

「大丈夫です、わかってますよ」

失言だったと思っただろうか。慌ててフォローを入れてきた白戸井に鈴は笑いつつ、つまんでいた髪を離す。

「自分では長い髪が気に入ってるんです」

「そっか。って、ごめん、結局引き留めちゃったな。お疲れ、原田」

「はい、お疲れ様です」

鈴は礼儀正しく頭を下げ、何度も白戸井を振り返りながらフロアを後にした。

季節は夏から秋へと変わり、廊下の冷気に身が震える。日中は温かいのだが、日が暮れるともうこれだ。そろそろ厚手の服を用意しなければならぬと思いつつ、揺れる髪をもう一度掴んで目を細めた。

昔から髪が短かった鈴に髪を伸ばすきっかけをくれたのは、付き合ってから一年以上経つ恋人の本村武雄だ。

同じ会社の人事部所属で、職場ではいつも穏やかな笑みを浮かべている彼。今年で二十五歳になった鈴よりも九歳年上の三十四歳で、背はスラリと高く、いつも銀縁メガネを装備している。

そんな会社ではストイックな雰囲気の時も、鈴にだけは特別な表情を見せてくれる事が多い。まるで子どものように甘えてくる事もあれば、他の男と親しくしている姿を見て嫉妬し不安を露わにする事もあった。

それでも、鈴を第一に考え、いつだって優先し包み込んでくれる大事な人。

自分にはもったいない人だけど、自分には彼が必要だし、彼もまた自分の事が必要と

言ってくる。

だからこそ鈴は今、悩んでいた。

あれは、今から八ヶ月前の三月の事。昔から男運がなく、悪い男にはかり引つかかってきた鈴だが、その中でも史上最悪の元彼、峰巨太が突然自分の前に現れた。

彼は鈴に復縁するよう迫っただけではなく、言う事を聞かなければ、本村に危害を加えて、写真を撮れなくしてやると脅してきたのだ。

本村にとって写真とは、自分を形作るものの中で最も大切なもの。彼の撮る写真はどれも美しく、人の心を魅了する。

鈴は彼の写真が好きだった。自分のせいで撮れなくなってしまうなんて耐えられない。悩みに悩んだ末、鈴は、峰の言うまま、本村に相談する事なく別れを切り出した。どんな理由であれ、それは本村にとって裏切り以外の何ものでもないのに。

また、本村に別れを切り出すきっかけを作ったのが、鈴の幼なじみであり、今では職場の上司でもある城崎隼人の存在だったりする。一人で対処する事ができず、思わず相談した城崎から、本村と別れるよう促されたのだ。元々城崎に対して良い感情を抱いていなかった本村は、自分ではなく城崎を頼って彼の言葉を受け入れた鈴を激しく責めた。常に鈴を優しく包み込んでくれる本村が、愛しているからこそ許せないと言ったのだ。

いつだって幸せになりたいと願っていたのに、幸せをくれる人を安易に手放そうとした自分。そこでようやく鈴は気がついた。男運がないせいで自分ほひどい目に遭うのだとずっと思い込んでいたけれど、本当は鈴のほうがダメな男に必要とされる事に自分の存在意義を見いだしていたのだと。

男たちに利用されていると被害者意識ばかり持っていたが、自分もまた、相手を利用していたのだ。結局すべて自業自得。この負の連鎖を断ち切らない事には、自分に未来はない。

だから鈴は、自分の意思で峰に立ち向かった。いつだって断る事ができず、流されるまま付き合っていたけれど、しっかりと自分から別れを告げた。周囲の支えはもちろんあったが、自分の手で、自分の言葉で。

そうして、峰との縁を切った鈴は本村に懇願した。これからもずっと傍にいて欲しいと。彼はそれに頷いてくれた。一歩前に進めた気がした。

それから、鈴は過去の自分と決別するために、引越した。元々、不相应な広い家に住んでいたのだ。未練はない。

新居は、本村の家から歩いて五分もかからないマンションだ。これなら楽に行き来する事ができる。

三月の一件以降しばらくの間、鈴に別れを切り出されたのがよっぽどこたえたのか、

本村は落ちつかない様子だった。鈴が出かければいつ帰ってくるのかと聞くし、鈴に電話が来れば相手は誰だと確認してくる。城崎と一緒にいようものなら、「また城崎君かい？」と不満を露わにした。

自分が彼をそうさせてしまったのだ。

鈴は極力、彼を不安にさせないよう努力した。なるべく早く家に帰り、何でもない事でも彼に逐一報告して、あなたが好きですと繰り返して口にした。彼への想いに嘘はないのだ。三月の事で地に落ちた信頼を取り戻そうと必死だった。

そして、それから数ヶ月経った頃、本村がふいに落ちついたのだ。

ピリピリした雰囲気がなくなり、まとう空気が穏やかになった。一体何がきっかけだったのか、鈴にはわからない。

落ちついたのなら良いじゃない、と、鈴と親しい同期、基山知子は言う。

だけど鈴は言いようのない不安に駆られていた。彼の不安が消えた事で自分が不安になるなど、皮肉な話だけれど、彼がどこか遠くへ行ってしまうような気がしたから。

「ああ、鈴、ただいま。今日は鈴のほうが早かったんだね」

白戸井よりも一足先に退社し、近所のスーパーで食材を購入した鈴は、自宅には帰らず、本村の家で夕飯の準備をしていた。

月末で忙しいのか鈴よりも帰宅が遅かった本村は、玄関のパンプスと美味しそうな香りに笑みを浮かべてキッチンを覗き込んでくる。

「お疲れ様です武雄さん。まだもうちょっとかかるので、お風呂でも入ってきて下さい」

「ごめんね、色々させて。じゃあ、お言葉に甘えて入ってこようかな」

本村は仕事鞆をソファの脇に置き、背広をハンガーにかけてから、バスルームに入っていく。程なく聞こえたシャワーの音。それを聞きながら鈴は一つため息をついた。

本村と一緒にいたい、その想いは日に日に強くなっている。しかし同時に脳裏にちらつく影もあった。

それは、幼なじみである城崎と、母である原田音羽の存在だ。

料理の準備を終えた鈴は本村愛用のソファに腰掛ける。もたれ掛かって目を閉じれば本村の香りがしたような気がした。

鈴は父親の顔も名前も知らない。

知っているのは、まだ十代だった母を甘言でそそのかし、子どもができたなら早々に逃げたという事。父には他に妻子がいたのだそう。

だから、生まれてきた鈴を歓迎してくれる人は少なかった。祖母や親族は音羽の人生を台無しにされた憤りを幼い鈴にぶつけ辛く当たったらしい。だから音羽は鈴を連れて逃げ出した。それからは、女手一つで鈴を育てた。

昼夜問わず働く音羽に代わって鈴の面倒を見てくれたのが、同じ団地の向かいに住んでいた城崎だった。彼の家族もみんな鈴に優しくしてくれたけれど、困った時助けてくれる「単人にい」の存在は鈴にとって世界のすべてだったと言っても過言ではない。

何もかもが城崎を基準に動き、いつだって彼の後を追いかけていた。

周りから見れば微笑ましい光景だっただろうけど、鈴は周囲が思っている以上に城崎に依存していた。だからこそ、幼い頃の「あの事件」が鈴の心を激しく打ち砕いたのだと思う。

過去の清算なしに前進する事は叶わない。だから頑張ると決めたのに、いまだ実行に移せぬまま。臆病な自分に嫌気が差してくる。

「鈴、ごめん、待たせたね」

濡れた髪をタオルで拭いながら、部屋着に着替えた本村がやってきた。仕事場ではしっかりとセットしている髪が水分を含んで垂れている。

鈴はこの、自分の前でしか見せないであろう本村の姿が好きだった。ほんやりしたまま、思わず見惚れてしまい、本村の「鈴？」と呼ぶ声に疑問符が付く。

「あ、すみません！ 食事にしましょうね！」

我に返った鈴は勢い良く立ち上がり、バタバタとキッチンへ走った。

「何か手伝おうか？」

「温めるだけなので大丈夫ですよ！ 座って待って下さいね」

「何から何まで悪いね」

そう言っ、こちらの事を気にしながらも本村はテーブルの席に着く。キッチンに駆け込んだ鈴は、流し台の縁に手を置き、自身を落ちつかせるように大きく息を吐いた。

「……何か悩み事でもある？」

そう問われたのは、ベッドに横たわり、本村が覆い被さってくるのをぼんやりと見上げた時だった。

メガネを外そうとしていた本村は、鈴の表情が気になったらしくその手を止め、隣にゴロリと横になる。凶星を指された鈴は、本村とは逆に横たわっていた体を起こした。

スプリングが跳ねて二人の体が上下する。本村も体を起こし、ベッドの上であぐらをかいた。

「仕事の事かい？」

本村は鈴の反応を見て、何か問題が起きている事を察してしまったようだ。こういう時、上手く誤魔化せない自分の不器用さが嫌になる。

「仕事の事ではないんです」

嘘をつく事ができなくて素直に話すと、本村は、

「だったら……」

と口を開いた。本村が言葉で追いつめれば、きつとすぐに鈴の問題の正体に気付くだろう。鈴は思わず身を固くする。

しかし彼は、それ以上何も言わなかった。

代わりに右手を持ち上げて、慰めるように鈴の頬を撫でてくれる。大きな手の平が長くなった髪を掻き上げ、優しい感触を残したまま離れた。

「溜めすぎないようにね」

彼は鈴の額に自分の額を押し当て、静かにささやく。本村の心遣いに鈴は胸がぎゅつと締め付けられるようで、思わず飛びついた。

「わっと」

勢いのまま、本村をベッドに押し倒す。彼のメガネが外れて床に落ちた。

「あっ、ごめんなさい……」

カシャンと音がしたので血の気が引いて、メガネが無事か確認しようとしたが、そんな鈴の体を本村は長い両腕で包み込む。

「いいよ、どうせ外すんだから」

「でも」

「いいから」

本村は獣が獲物に食らいつくように鈴の喉元を吸い上げてから、鈴の体を反転させて布団の上に縫い止めた。

「詮索はしないけど……、もし、俺に話さなければいけない事があるなら、ちゃんと話してね」

心配をかけているのはこちらなのに、本村はお願いするようにそう言った。鈴はすぐに「はい」と返事をする。

彼になにも相談せずに別れ話を切り出したあの時のように、彼を傷つける事だけはしたくない。

ちゃんと返事をした鈴を見て、本村はホッとした様子で鈴の額に口づけた。

「難しい顔させてごめん。大丈夫なら良いんだよ」

本村はそれ以上追及しようとしなない。鈴の指に自分の指を絡め、手の甲にもキスを落とす。その時、骨が浮き上がった彼の手の甲が鈴の目に映った。

(傷……)

彼の手の甲に走る傷跡。これは、元彼の峰と口論になり、パニックに陥った鈴が訳もわからずベランダから飛び降りようとした時、本村が鈴の目を覚まさせるために負った傷だ。

何もかもが嫌で逃げようとした鈴に「君が死ぬなら俺も死ぬ」と叫んで。それでも信

じられない鈴に知らしめるように、彼はガラスを叩き割った。手から溢れ出る真っ赤な血を鈴は今でも覚えていて。それが鈴をこの世に繋ぎ止めた。

「……消えませんがね、これ」

「ん？」

「これ……」

鈴は繋いでいないほうの手で傷跡をなぞる。そこだけ、他の皮膚とは違う色合いで、うっすら盛り上がっていた。

「自分では大分薄くなったと思うんだけど」

「でも、やっぱりわかりますよ」

「まあね。でも俺は」

本村は鈴の手を離し、傷跡が残る手の甲を掲げて見せる。

「鈴を守ってできた傷だから、気に入ってるんだよ。男の勲章とまがってやつじゃないかな？」

どこか誇らしげな本村の表情。そんな発想はまったくなかった鈴は一瞬呆気にとられたが、すぐに笑みを浮かべる。

「武雄さん、すごいです」

「別にすごいじゃないよ」

ようやく笑った鈴に本村は安心した様子で、ベッドに広がる鈴の髪を指先に絡めた。

「最近ね、鈴にとつての幸せって何だろうって考えるんだ」

「私にとつての幸せ、ですか？」

唐突に思える切り出しに、鈴は「幸せ」という単語を復唱する。

彼はどこか遠くを見るように、視線を窓の外へ流して話し出した。

「いい年こいて恥ずかしいけど、俺は時々恐ろしいほど視野が狭いから……」

達観した様子でつぶやく本村に、鈴は笑顔でいられなくなった。湧き立つ不安に身が竦む。

三月の事件から大分経つが、城崎や母の事など、事態解決に踏み出せなくて日に日に焦燥感しょうそうかんが募る鈴とは違い、本村は物事を俯瞰ふかんで見ているような言動をするようになった。それに、なんだか置いていかれているような気分になってしまふ。

本村が言う、自分の幸せとは何だろう。もう十分すぎるほど幸せなのに、という答えしか見えない。

「私に幸せですよ？」

「私は幸せですよ？」

そんな思いを込めて言った言葉に本村はようやく鈴に視線を向け、困ったような笑みを浮かべた。

「……そうだね」

鈴の言葉を肯定しながら、それでもなお、彼の表情は晴れない。

一体何を考えているのだろうか。それを聞いても良いのか、鈴にはわからなかった。

鈴は本村の胸にぐっと体を寄せる。鍛えられた胸板に耳をあてると、心臓の音が微かに聞こえ、少しだけ安心した。

「……可愛いね」

先ほどまでの憂いの表情は消え、彼の声に熱がこもる。

鈴が両手を伸ばせば本村が体を屈め、そっとキスをしてくれた。入り込んできた舌に己の舌を絡ませながら、誘うように彼の腰を己の太腿で撫でる。本村の片手はその足を掴み、手の平で撫でさするようにして太腿を往復した。

彼の手は膝と太腿を行き来し、ショートパンツの上から内股を通る。

そのまま足の付け根に触れたかと思いきや、何事もなく通過し、今度は反対側の足の太腿を撫で始めた。

「あ……やだ……」

もったいぶる緩慢な動き。

「辛い？」

鈴のか細い声を聞き逃さなかった彼が、布地の上から秘裂を手の平で覆い、指先で圧

迫した。

「あっ、ん」

そのままグリグリと上下に動かす。ショートパンツと下着が皮膚を擦り、鈴は体を震わせ顔を背けた。

本村は中指を立てると、さらにぐっと押さえつける。服の上からでも秘裂の上に芽を出す突起がわかるようだ。

「やっ、あ……っっ」

鈴が悶えるのを見つめながら、本村は右手をそのままに、左手で鈴の上着をたくし上げた。大きな手の平が即座にブラジャーの中に忍び込み、胸の先端を摘み上げる。

「あっ！」

「もう、固くなってるね」

彼はそう言って、摘んだ先端を指先で弄りだした。

キユッと捻り、ぐいっと引つ張り、痛みさえ感じるそれがたまらなく刺激的で次々声が漏れる。

足の付け根には依然、彼の指が突き立てられていて、どちらに意識をやればいいのかわからなかった。

「武雄さん、そんなにしっちゃ……っ」

本村のシャツを掴み訴えれば、彼は鈴の頬に唇を押し当て、ペロリと舐める。

そして、刺激を与えていた手をいったん離し、鈴の服に手をかけた。あれだけ激しく鈴に刺激を与えていたというのに、丁寧に一枚一枚服を脱がせていく。それがもどかしい。だけど本人に伝えるのは恥ずかしくて、じんと疼く蜜壺を隠すように内股を摺り合わせながら大人しく待った。

そうして、鈴の服をすべて脱がせた後、本村は自分の服を乱雑に脱ぎ捨てて、一糸まとわぬ姿で彼女を抱きしめる。

肌が触れ合う感触に心地よさを感じながらも、すでに灯された炎は勢いを弱める事なく鈴の体を疼かせていた。普段仕事場で見えるスーツ姿ではわからない本村のしなやかな体が、鈴の気持ち搔き立てる。彼に征服されたいと思った。

「武雄さん……好き……」

鈴のささやきに本村が荒々しく鈴の唇を塞いだ。

「好き、好き……」

溢れ出す言葉に偽りは無い。本当に本村が好きで好きでしょうがないのだ。

シヨートパンツの上から弄られた秘裂はすでに蜜を垂らしている。本村は今度はそこに直に触れ、そのまま指を深く沈ませた。

「ああ……っ！」

あつという間に指の根本まで押し込まれ、内壁を刺激してくる。指を左右に動かし、グルグルとかき混ぜて、鈴の音が溢れ出そうになったところで一気に引き抜かれた。

「ひあっ！」

そしてまたぐつと差し込まれる。衝撃が背骨を伝い喉が開くような感触を味わった。

「あつ、やあっ！」

悲鳴に近い声を上げると、本村の指は速度を増す。

「イっちゃう、武雄さん、イっちゃう……！」

快感を堪えるように奥歯を噛みしめようとしても、嬌声が唇をこじ開け外に飛びだしてしまふ。

いくなら指ではなく、彼を感じてからがいい。戦慄く唇を何とか動かし、「武雄さん、武雄さん」と名を呼ぶが、彼の動きは止まらなかった。

「だめっ、もう、このままじゃ、私、私……！」

汗ばんだ肌に髪が張り付き、大きな瞳に涙が溜まる。

せり上がる感触からは逃れられそうにない。鈴は観念したように固く両目を閉じた。

「……え？」

しかし、その直前、本村が動きを止め、体の中から濡れた指をずるりと取り出す。これでは生殺しだ。

恨みがましく本村を見れば、彼はまだ余裕があるのか口角を上げ、「鈴が『欲しい』って目で見てたから」とからかってくる。

確かにそうだけれどもと小さく唸れば本村は楽しげな表情のまま、鈴の唇にちゅ、と軽いキスを与えて、ベッドサイドの棚から避妊具を取り出した。

彼はそれを素早く装着すると、ベッドに横になっていた鈴の腰に腕を回し、軽々と持ち上げて膝の上に引き摺り上げる。

上半身はベッドについたまま、下半身は彼の膝の上に乗って軽く浮き上がった不安定な状態。本村は鈴の腰を支えるように手を添えると欲望に膨らみ屹立したモノを宛がった。そして、ぐっと力を込める。

「あ……っ！」

熱い楔が鈴の内壁を抉り、最奥まで一気に貫いた。衝撃は脳天を突き抜け、理性が吹っ飛び、心が爆ぜる。

真っ白になった頭は考える事を放棄し、悦楽の海へと自分を放り出した。

いつてしまった。たった一回、貫かれただけで。

餌を求める鯉のようにハクハクと動く唇から、臍に溜まった熱い呼吸が抜けていく。吐息は空気に混じり部屋に拡散していった。

思考が戻ると共に湧いてきた羞恥心。思わず頬が上気する。本村は気にした様子もなく、そんな鈴の体を抱き上げ膝の上に座らせた。

力が入らず後方に倒れそうになったが本村にまた引き寄せられ、彼の体にもたれ掛かる。

肩を上下させる鈴とは違い、彼は呼吸一つ乱してないが、それでも、押し当てた胸の奥、心臓の音は普段よりも弾んでいた。そのリズムが心地いい。

しかし、いつまでもそんな穏やかな状態のままではくれなかった。

「ああっ！」

彼は鈴の体を下から突き上げてくる。振り落とされないようにしがみつけば、己の汗が彼の肌を濡らした。

「俺も、この状態のまま……辛くてね……っ」

本村は鈴の腰に手を添え、上下に揺らしながら動きを速める。本村の動きに合わせてベッドのスプリングがギシギシ鳴った。結合部からはぐちゃぐちゃと卑猥な音が鳴り響いている。

その動作を繰り返しているうちに、次第に本村の体も汗ばんできた。彼の香りがいっそう濃くなる。

「鈴も動ける？」

荒くなった吐息に合わせて、本村が切羽詰まった声でささやいた。

考えてみれば今日は本村任せで自分は何もしていない。そんなところからも、以前の自分との違いを感じ取る。

昔、本村以外の男と抱き合っていた時は鈴が奉仕するばかりで、まったく気持ち良くなかった。抱き合うのが苦手で相手が早くイク事だけを考え、体を動かしていた。

しかし、今では立場逆転。気がつけば彼が与える快感に身を任せている。

鈴は大きく息を吸い込んで頷き、本村の胸に手をついた。そして、彼の動きに合わせて腰を上下に動かし始める。

「ん、んう……」

「……は……」

鈴の鼻から抜けるような声に、本村が短く呼吸する音が混じる。

加減がなくなり始めた彼の動きに体を扶かれそうだ。ズブズブと最奥を突き刺す欲望に鈴の秘所から蜜が止めどなく溢れ出す。

気持ち良い。

これ以上なくその言葉が当てはまる。二人で一緒に、同じ所に向かっている感覚がたまらなく好きだ。

それに、体だけではなくもっと深い部分、心の奥底までぐちゃぐちゃに溶け合っている

ような気がする。

本村と抱き合うのが好きだ。愛し合うのが好きだ。想い合う心地よさを教えてくれたのは他でもない彼だ。

だからこそ自分は行動しなければならぬと思っている。

「鈴……っ」

本村の掠れた声が響く。彼は鈴の背に大きな手の平を添え、ベッドに倒した。本村がその上に折り重なり、鈴の太腿を持ち上げ、荒々しく挿挿を繰り返す。膨らみきった欲望が鈴の体を隙間なく満たし、彼の限界が近い事を感じながら、激しさに身を任せた。

「……っは、う……っ」

小さな呻きと、体の中で跳ねる欲望。太腿を掴む彼の指が肉に食い込んでいく。

鈴が大きく息を吐き目を閉じると、瞳に薄い膜を張っていた生理的な涙が一つ零れた。

「鈴……」

頬にできた涙の道を本村が拭う。重たい瞼を開いて彼を見れば本村は微笑んでくれた。

「……結局、武雄さんの家に入り浸りです」

それから二人でシャワーを浴び、ふたたびベッドに寝転がった。本村の腕に頭を乗せ、肩を抱かれた状態のまま鈴がそう言えば、本村が「確かに」と笑った。

本村の家のすぐ近くに引越してからというもの、自分の家ではなく本村の家で過ごす時間が増えていく。ほぼ同棲状態だ。

「最近、鈴が家にいないと落ち着かなくなってきたよ」

迷惑じゃないかと心配しかけたところで、本村がやんわりとそう言ってくれた。いつも鈴の沈む気持ちを先回りしてすくい上げてくれる本村にただただ感謝する。

「私もです。家に一人でいると、なんだか落ち着かなくて」

「ホント?」

「ホントですよ。あれ、武雄さんがいない、なんでだろ……って。朝起きた時とか、よく思います」

「そうかー。それは嬉しいな」

言葉通り彼は嬉しそうに表情を緩ませた。九歳年上の彼が幼く見える瞬間だ。年上の男性にこんな事を言っては失礼かもしれないが、可愛いと思ってしまう。

「……色々心配事はあるかもしれないけど、まあ、気楽にいきましょう? 色々考えると、鈴はすぐに変な方向に向かうから」

「な! 武雄さん、ひどいです!」

がばつと体を起こして言うと、本村が楽しそうに笑った。その笑顔が子どものように無邪気で、鈴の怒りは一瞬で消えていく。

「ほら、おいで」

手招きされて大人しく定位置に戻る。本村は鈴の髪を撫でながら、

「のんびりでいいさ」

と、鈴を慰めるように言った。

本村の大きな手が、鈴の髪を撫でる。本村がきつと似合うから伸ばしてみなよと言ってくれた髪を。

やがて、静かにまどろみへ引き込まれる。

このままきつと、良い夢を見られる。そんな確信があったのに。

実際に見た夢は、昔の辛い記憶だった。

ビルが建ち並び空を狭く感じる東京とは違い、その場所はいつだって抜けるような青空が広がっている。

場所は神奈川。長い坂を上った先、小高い丘に立ち並ぶ集合団地が自分の家だ。

たった一人の家族である母親は、昼はパートに出かけ、夜はスナックで働き、忙しい。しかし、寂しいなんて言っても困らせるだけだから、いつもぐつと我慢し母親を見送る。

それに、自分には幼なじみである城崎がいた。五歳年上の彼は、何かにつけて鈴の面倒を見てくれる。

隼人にいさえいってくれば大丈夫。そんな思いが、幼い鈴には常にあった。だから多分、これはこれで幸せだったのだ。家は貧しくとも、大好きな人達が傍にいてくれたのだから。そんなある日、母親が突然、知らない男を連れてきた。年は四十代、背が小さく小太りなその男は、音羽の店の常連客だという。店とはスナツクの事だろう。

音羽が言った。

「鈴、お母さんね、この人と結婚しようと思うの」

「結婚？」

「ええ。この人が、鈴のお父さんになるのよ」

「おとう、さん……？」

生まれてこの方、父という存在と無縁で育った鈴は、その響きに違和感を覚えた。

……どうして突然知らないおじさんがお父さんになるの？

それなら城崎の父親がお父さんになってくれたほうがよっぽどいい。

しかし、母はその男が父だと言う。

当時、まだ小学校高学年で、結婚は好きな人とするものだと思っていた鈴には理解できなかったが、音羽の結婚には裏があった。

父親がおらず、いつも家を空け、娘に寂しい思いをさせている上に、経済的にも苦しい状況だ。

大事な一人娘を何不自由ない環境で育てたい。その願いが音羽を結婚に踏み切らせた。

「とても優しい人なのよ」

そう言っ、音羽が鈴の背中をやりわり押す。鈴はつんのめるようにして一歩前に出

た。そして、これから「父」となる男を見上げる。

「よろしく、鈴ちゃん」

に、と口角を上げ、自分を舐めるように見つめる男。鈴は何故か悪寒おかんが走った。

義父と自分達の関係は、複雑なものだった。結婚して家族になったのだ。本来であれば一緒に住むのだから、家は別々。鈴は変わらず団地に住み、義父はどこに住んでいいのかも知らない。

それに、結婚前は何かにつけて鈴を義父に会わせていた音羽が、結婚後、急にやつれ、彼と鈴の接触を避けるようになった。会うとしても必ず音羽が一緒だ。家で義父の話をすることもなくなった。

義父とは言えば、会うたびに小人形や可愛い洋服、お菓子などを買ってきてくれた。そして、「鈴ちゃんは可愛いね」と頭を撫でたり手を握ったり。

ただのスキンシップかもしれない。しかし鈴は、義父が自分に触れるたび、ゾツとした。

「鈴、お母さんがいない時、もしあの人が来ても、絶対にお家へ上げちゃだめよ」
音羽にそう言われたのは、義父に対する言いようのない不快感が胸を占め始めた頃だ。
音羽に言われて正直ホツとした。こんな事を思うのは悪いが、できれば義父に会いたくない。

端から見れば好きな物を買って与えてくれる優しいお父さんかもしれないが、鈴はどうしても義父を好きになる事ができなかった。何故そう思うのか、自分でもわからなかった。どうせなら、一生わかないままが良かったのに。

鈴は、不運にもその理由を知ってしまったのだ。

それはいつもと変わらない平日の事だった。普段通りに学校が終わり、普段通りに下校して、坂の上の我が家を目指す。

「隼人には今日も遅いのかなあ」

当時、城崎は県下でも有名な進学校に合格し、学業に励んでいた。勉強だけではなく、学校が終われば中学校時代の仲間とつるんでサッカーをしているようだ。

どうやら彼女もいるらしい。

向こうが告白してきたから何となく付き合ってるだけなんて言っているけど、実際どうかはわからない。

高校生で付き合ってるならキスくらいはしてるよお、とませた友達が言っていたが、想像するだけで悲しかった。恋とか愛とかはよくわからないが、鈴は城崎の事が好きなのだ。城崎を他の人に取られるのが切なくてしょうがない。

「……隼人にはお母さんとも仲良いで……」

それを考えると、もっと気分が滅入る。城崎は何か辛い事があると、音羽に相談する事が多かった。相談、というよりも、音羽が城崎の沈んだ空気を察して話を聞いてあげていると言った方が正しいかもしれない。

鈴だって城崎が元気がない事はわかるのだが、落ち込んでいる城崎を見ると、自分のほうが悲しくなってしまう。

そんな鈴に城崎が弱い部分を見せるはずもなく、結局、彼に甘えてばかりだ。

しかし自分だっってもうすぐ中学生。いつまでも彼に迷惑をかけてばかりではいられない。

「いつかはお母さんみたいに、隼人にいが頼ってくれるようになるといいな」

そんな事を思いながらようやく到着した団地の階段を一段一段踏みしめる。

そうして、最後の階段を上がりきった時、自分の家の前に誰かが立っている事に気がついた。

「……！」

見ればそれは、自分の義父だった。向こうはすでにこちらに気付いていたようで、驚

きに目を丸くする鈴を見て義父は笑う。

「あの、今、お母さんいないですよ」

音羽はこの時間、働いていて家にはいない。

結婚すれば鈴と一緒にいられる時間も増えるはずだからと言っていたのに、結局以前と変わらない生活で、むしろ前以上に働いているかもしれない。

体を強こわばらせながら言った鈴に、義父は、

「今日は鈴ちゃんに会いに来たんだ」

と、答こたえた。

「私に？」

「ああ。家族になったのに、なかなかゆっくりお話できなかったからね」

義父はそう言って鈴の頭を優しく撫でる。触れられた瞬間、ゾワッと鳥肌が立った。

「色々お土産も持ってきたんだよ。可愛い洋服に、お菓子もあるよ。さあ、家に入れてもらえるかな」

義父の手にはたくさんの紙袋。鈴が喜びそうな物をたくさん買ってきたのだろう。だけれど鈴は、義父と二人きりにはならないようにと音羽に言われていた。

躊躇ためらう鈴に、義父は「ほら、早く」と急せかしてくる。鈴は自分の家の正面に位置する城崎の家を背に感じながら、隼人にい、と心の中で呼んだ。今すぐここから逃げ出したい。

「ほら、早く。ほら、ほら！」

けれど、そんな勇氣もないわけで。義父は鈴の腕を掴つかみ、扉の前へ押し出す。

「早くこのプレゼントをあげたいんだよ。家にかけておくれ」

そもそも、自分が勝手に苦手意識を持っているだけで、義父はいつも親切にしてくれているのだ。

無下に追い返せるはずもなく、鈴は強こわばった表情のまま家の鍵を開けた。

家を上がり込んだ義父は、早速紙袋の中から可愛い洋服を取り出した。

「ほら見てごらん。鈴ちゃんのために買って来たんだよ」

しかし、私服で着るには恥ずかしい、フリルやレースの服ばかり。パーティー会場でもなければ浮いてしまうだろう。学校に着ていたらみんなに笑われてしまう。

「どうだい、可愛いだろうか？ こういうの、好きだよね？」

義父はしたり顔で問うてくる。否定する事もできず、鈴はひとまず服を胸に抱いて、「ありがとうございます」と頭を下げた。

「せっかくだから、着てみてくれないかな」

「えっ……」

鈴だって、可愛い洋服には憧れを抱いているが、義父がくれた服を着る事には抵抗が

あった。

「鈴ちゃんのために買ってきたんだから。着てるところを見せてくれないと困っちゃうよ」
 義父の言葉に、鈴は胸に抱いた洋服を見つめる。こうなったら仕方ない。洋服を着て、満足して帰ってもらおう。

そう思った鈴が着替えをすべく、脱衣所に向かおうとしたその時だった。

義父が突然、鈴の細い腕を掴み、力任せに引き寄せる。驚きに見上げた義父の顔は、怖気がするほど醜く、下卑た笑みを浮かべていた。

「お父さんが着せてあげるよ」

それからの事はほとんど覚えていない。

鈴は半端に服を脱がされ、抱きしめられ、ぐっと顔を近づけられて。

「や……!!」

無理矢理キスをされ、そのまま、畳の上に押し倒された。

あまりの恐怖に声を上げる事さえできない。のし掛かり鈴の肌をまさぐる手が気持ち悪い。

鈴の頭が真っ白になっていく。それでも、叫び続けるもう一人の自分がいた。

……助けて。

声にならぬ声だけれど。

……助けて、隼人にい——!!

思い浮かべるのはいつも自分を守ってくれる彼の姿。

義父は急いた様子でベルトのバックルを弄っている。鈴はただ、固く目を閉じる事しかできなかった。

「……!?!」

しかし不意に玄関からガシャン、と何か大きな物音が聞こえた。義父は手を止め、玄関の方を凝視する。するとまた、大きな音が打ち鳴った。

「鈴、鈴っ!!」

そして声が聞こえる。

義父はハッと顔を上げ、落ち着きなく左右を見回した。今まで浮かべていた愉悅の表情は消え去り、青ざめている。

「鈴、鈴! くっそ、チェーンが……。待ってるよ鈴! すぐ行くから!」

遠くで城崎の声が聞こえる。幻聴かと思った。幻聴でも良い。彼の声が聞きたい。

「鈴!」

力強い、彼の声。

そんな鈴の耳に、城崎の声ではなく、ペランダの窓が割れるけたたましい音が響いた。義父は「ひっ」と情けない悲鳴を上げてから、鈴をほったらかして玄関へ駆けていく。

「鈴……！」

ようやく解放された鈴の体を、今度は別の誰かが抱きしめた。

「鈴、鈴……！」

先ほどとは違い、近くで城崎の声が聞こえる。

声だけじゃない。ポタリ、ポタリと、自分の頬を濡らす何か体が体に染みこんだ。焦点の合わない瞳を動かし、ようやく世界を認識した。

(……隼人にいだ)

そこに、自分のために涙を流す城崎がいた。

最初は幻かと思った。何故だか視界がぼやけているから。それは、止めどなく流れる自分の涙のせいだったのだけれども。

「鈴……っ」

城崎がいる。ここは安心できる場所だ。

鈴は重たい両手を持ち上げて、城崎にぎゅっとしがみついた。

(……隼人に、助けに来てくれた)

いつもいつでも自分を守ってくれた城崎が、今日も自分を助けてくれた。それがたまらなく嬉しかった。

強ばっていた体がほぐれ、恐怖が静かに抜け落ちていく。

そんな鈴を、城崎は抱き返してくれた。

それから城崎に抱えられ、鈴は城崎の家に連れてこられた。

見れば城崎だけではなく、その妹の楓と、母親の恵実までいる。

城崎しか目に映っていないかったが、どうやら三人で自分を助けてくれたらしい。

自分がひどい目に遭っている事を真っ先に察知したのは、城崎だったようだ。

城崎が言うには、今日はなんとなく落ち着かなかったため、早めに家に帰ってきたそうだ。いわゆる第六感というやつなのかもしれない。

そして、もうすでに家にいるだろう鈴に声をかけようとしたら、ドアには鍵がかかっていた。不審に思った城崎が音羽から預かっていた合鍵を使ってドアを開けると、チェーンロックがかかっている。しかもそこには、見慣れぬ男物の靴が転がっていた。

後は体が勝手に動いたそうだ。

「とりあえず、ここにいろ、鈴」

城崎家に連れてこられた鈴は、城崎と楓が使っている子ども部屋の、二段ベッドの下ろされた。

安堵はしたが、緊張状態は続いているらしく、城崎にくっ付いたまま離れる事ができない。連絡を受け駆けつけた音羽すらも受け付けられなかったほどだった。

「鈴……」

音羽はあまりの事に呆然とした表情で、城崎の陰に隠れる自分を見る。しかし鈴は、母の視線を避けるように顔をそらした。鈴は母を拒絶したのだ。それを見て音羽は改めてショックを受けた。

音羽の傷ついた表情に、城崎が「鈴、音羽さんだぞ」と促すように声をかけてくる。知ってる、わかっている、だから嫌なのだ。だから憎いのだ。

「……やだ……!」

鈴は城崎の背にしがみついたまま、そう叫んだ。

「やだやだやだやだやだやだ!!」

全部全部、音羽が悪い。

音羽が反論できるはずもない。鈴の叫びに母はその場に泣き崩れ、ごめんね、ごめんねと繰り返し返した。

結局、音羽は義父の人柄を見誤ったのだ。

店に来ていた時は音羽を落とすために優しくしていたが、手に入ればこちらのもの。結婚するなり豹変し、音羽に暴力をふるっては金をせびる。

それだけではなく、義父には幼女趣味の気があったのだ。だからこそ、童顔の音羽を選び、さらにはまだ幼い鈴に目を付けた。音羽が後になって義父を遠ざけたのは、そん

な理由があつたからだったのだ。

しかし流石に、こんな事までするとは思ってもいなかっただろう。

「鈴、落ち着け……俺がいるから!」

取り乱す鈴を城崎が抱きしめる。彼にしがみつきながら、何もできず涙する母を睨み付けた。

「……っ!」

目が覚めたのは、まだ薄暗い部屋の中だった。

「……? 鈴?」

突然、勢い良く起き上がった鈴を見て、隣で寝ていた本村が寝ぼけ眼でこちらを窺ってくる。

「あ、ご、ごめんなさい、変な夢見ちゃって……」

平静を装いながら布団に戻ると、本村が鈴を抱き寄せた。

「ああ、そうか……。俺も時々あるよ」

「武雄さんも?」

「ああ。昔の嫌な夢を見て、汗だけで起きる事がある……」

だからこそ辛いのがわかるとても言うように、彼は鈴の髪を優しく撫でた。

「起こしちゃってごめんなさい」

「大丈夫……まだ朝まで時間があるし、もうちょっと寝よう……」

会話はそこままで、五分もすれば、本村の規則正しい寝息が聞こえてきた。

(……何やってるんだろ、私……)

体は成長したというのに、自分の中にはいつまで経っても幼い自分がいる。

考えを打ち消すように固く目を閉じるのに、眠気は来ない。仕方なく、暗闇の中で目を開き、ぼんやりとあの夢の続き、己の過去を思い起こした。

(……あの時も)

義父に襲われたあの日の夜も、今、こうやって本村が抱きしめてくれているように、狭い二段ベッドで城崎が自分を抱きしめてくれていた。

それだけではない。

城崎のおかげで最悪の結果には至らなかったが、ファーストキスを奪われてしまった。あんな事をされて、そこに拘こだわられるのも変な話だが、鈴はそれがとにかく悲しかった。

ファーストキスを奪われてしまった事を彼に話すと、城崎はしばし考え込んだ後、体を起こして鈴の上に折り重なる。

『鈴、俺……鈴の事、好きだから』

額に触れる彼の黒髪。自分を射抜く鋭い瞳まなこ。城崎の冷たい手が頬をなぞる。

『お前の事、守る。もう泣かせない、もう二度とこんな目に遭わせない』
いつだって真っ直ぐで、誰よりも誠実で。

『お前が俺の一番だ』

偽りを語らぬ唇が、鈴の唇を優しく包み込む。

彼から与えられた口付けは不思議と甘く、穢けがれがすべて消えていくような気がした。
『大人になっても俺の事が好きだったら、俺が嫁にもらってやる。……約束だ』

そう、あの時自分達は恋人同士だった。お互い幼かったけれど、鈴に至ってはまだ小学生だったけれど、彼の事ばかり考え、彼の事ばかり見つけて、恋、なんて言葉じゃ足りないほど、子どもながらに彼を愛していた。

だからこそ彼の告白に鈴は喜び救われた気持ちになって、いつか大人になって城崎と結ばれる事を夢見て、その日は悪夢を見る事もなく眠りにつけたのだ。

だけどそんな鈴の淡い夢は、あつという間に打ち砕かれる事になる。

「……嘘つき……」

暗闇の中、鈴は目を閉じて小さくつぶやいた。真っ直ぐな彼がついた嘘が、今も鈴の胸に突き刺さっている。

自分の事を一番だと言ってくれた城崎。だけど違ったのだ。

彼の一番は自分ではなく、……母の音羽だった。

翌朝、ジョギングを済ませた本村に起こされ、一緒に朝食を食べた。

朝食は鈴にばかり家事をさせては申し訳ないといつも彼が準備してくれる。

その後、いつも早めに出社する本村を見送り、鈴も遅れて家を出た。会社では二人の関係をごく一部の人にしか知らせていないため、一緒に行動するのは憚られるからだ。

おかげで、一年以上付き合っているにもかかわらず、自分達の事が職場で噂される事はない。

鈴は、時折城崎とは噂になる事があるので、もしかすると、それがカモフラージュになっっているのだろうか。

いつもの満員電車、小柄な鈴は周りに押しつぶされ、ヘロヘロになりながら職場近くの駅で降りる。出勤するだけで一苦労だ。

満員電車から逃れても人の流れは相変わらずで、サラリーマンやOLたちに混じりながら、流れに逆らわないように道を進む。

すると突然、背後からべしんと頭を叩かれた。

「った……」

「よ」

こんな事をする相手は一人しかいない。

「ちよつともお……!」

鈴は悪態をつきながら振り返る。そこにはニツと笑みを作る城崎がいた。

混じりけのない黒い髪に、意志の強さを表すような釣り上がった瞳。凛々しく整った面立ちは、通り過ぎるOL達がこっそり盗み見るほどだ。

背丈は本村ほど高くはないが、男性平均は軽く超えており、スラリとした体躯ながらも筋肉はしっかりとついている。

夢の中の彼はまだあどけなさを残していたけれど、今こうやって自分の前に立つ城崎は見まごう事なく、大人の男性だ。鈴の幼なじみであり、花形営業部の期待を一身に背負うエースでもある。

しかし、職場で見せる真剣な表情とは違い、今は気の良い幼なじみの顔をしていた。

「……おはようございます、城崎係長」

叩かれたお返しとでも言うように、鈴はあえて城崎の立場を強調するワードと態度で挨拶を返す。

「おっ、なんだよ、生意気だな」

すると、間髪容れずまた頭をはたかれた。完全に舐められている。

「ちよつともお、止めてよ隼人にい！ 私だつていつまでも子どもじゃないんだからねっ！」

頬を膨らませながら文句を言う、城崎は、

「まんま子どもじゃねーかよ。化粧しても未成年と間違われるくせに。周りに疑われずに酒を買えるようになってから言えよ」

と、ひどい事を言う。

城崎が言うように童顔な鈴は酒を購入する際、身分証明証の提示を求められる事があつた。

流石幼なじみ、痛いところを突いてくる。

「なんで朝からそんな事言うのよ！」

「挨拶しただけなのに、お前が生意気言うからだろうが」

「挨拶しただけじゃないでしょ、頭叩いたでしょ！ もう、せっかく気分のいい朝だったのに台無しだよ」

「気分のいい朝？」

「そうだよ。もう、隼人にいの馬鹿」

お返しとばかりに今度は鈴が城崎の腕を叩く。

彼は、鼻で笑つて鈴を追い越した。

「首」

「え？」

そして、すれ違い様にそうつぶやく。

「髪下ろすか、スカーフ巻くかしたほうが良いぜ」

言われた鈴は何を言っているのかわからずしばらく呆然として、ようやく事態に気がつきハツと首を押さえた。

本村が情事の最中に付けたキスマークが残っていたらしい。

城崎は一度だけこちらを振り向き、鈴の慌てた表情を確認してさつさと一人で رفتってしまった。

もしかするとそれを教えるために話しかけてきたのだろうか。

「ど、どうしよ……」

ひとまず城崎が言った通りアップにしていた髪を下ろして首回りを隠す。

それから手鏡を取りだし首の周辺を確認するのだが、それらしいものを見つける事はできなかった。恐らく、見えない場所についているのだろうか。

一体どのタイミングで付けられたのだろうか。正面から首筋を吸い上げられた事は覚えていないが、他は覚えていない。

そもそも抱き合っている最中の出来事なんて臆げだ。それにしても、キスマークを幼なじみの城崎に見られてしまうなんて。気まずさに頭を抱え込む。

「……何やってんの鈴さん」

そんな鈴に、今度は呆れた声が届いた。

見ればそこには鈴の同期であり親しい友人でもある基山知子が立っている。

凛々しい顔立ちの城崎と同じく、基山も周辺のサラリーマンが振り返る美しさ。しかし、あれでも面倒見の良い城崎とは違い、彼女は人を寄せ付けない鋭利な空気をいつもまとっている。

「知子さん」

「さっきから百面相じゃないの」

鈴は基山にスバリと指摘され苦笑してから、彼女がいつも結わいている絹糸のように滑らかで真つ直ぐな黒髪を肩に垂らし、普段つけないスカーフを首に巻いている事に気づき首を傾げた。仕事第一な彼女はさっぱりした格好を好むのに。

それに、本村と同じように出社が早い基山が、自分と同じ時間にここにいるのは珍しい。

「知子さん、今日は遅いね」

「……まあね」

途端、基山が不機嫌な表情を浮かべる。地雷を踏んでしまったようだ。

「あ、ご、ごめん」

「いいのよ別に。鈴さんが悪い訳じゃないし」

慌てて謝ると、基山は諦めたように息を吐いた。

「……何かあったの？」

「怖々理由を尋ねると、基山は苛立ちを隠せない様子で、

「加藤の馬鹿が離さなくてね。このザマよ」

と悪態をつく。

加藤登は基山の恋人だ。基山よりも四歳年上で、長身の本村より背が高く、体つきもガッシリしている。

城崎の高校時代の後輩という事もあり、鈴も基山に出会う前から加藤とは面識があった。人なつっこい性格で、人の感情に敏感な優しい男だ。

「え、嫌って言わなかったの？」

「止めろって何度も言ったわよ。でも聞かなくて」

いつも基山の尻に敷かれている加藤が基山の言う事を聞かないなんて珍しい。目を丸くしていると、基山は忌々しげに語る。

「明け方、泥酔状態でうちにやってきてほとんど力づくよ」

「あー……」

シラフじゃ基山を襲えなかったのだろう。鈴は加藤に同情した。

「あの馬鹿、力だけはあるのよね」

「男女差だけでも結構あるけど、加藤さん大きいしね」

「おかげでこれよ」

そう言って、基山がスカーフを緩め、黒髪を持ち上げる。そこにはいくつものキスマークが散らばっていた。

「……激しい」

「半年くらいやってなかったから、大暴走よ」

「え、半年もしてなかったの？」

最低でも週に一度は抱き合っている自分達にしてみれば、半年お預けというのは途方もない月日に感じる。

「付き合いの長いカップルなんてそんなもんでしょ。大体、私、するの好きじゃないし。面倒くさいのよ、セックスって」

「あー、そっかあ……」

「最後は蹴りつけて出て来たんだけどね、どうせ今頃爆睡してるわ。それで、起きたら全部忘れてケロツとしてるのよ。ああ、腹が立つ」

持ち上げていた髪を下ろして拳を握る基山から、凍てつくようなオーラが溢れ出す。

これは一悶着ありそうだと思しながら、鈴も、

「私もついちゃってるみたいなんだ」

とため息をついた。

「え、鈴さんも？ 平日までするなんて、相変わらずお盛んねえ」

本村と同じ人事部所属の彼女は、「本村主任で、仕事場じゃ性欲なんてありませんよって顔してるのに」と感想を述べる。

「ちよ、ちよっとしたただだよ。あ、そうだ、知子さん、どの辺についてるかな？ 手

鏡じゃ見えなくて」

「え、場所わからないの？」

「うん。目立つようだったら私もスカーフしとかないと……」

基山は鈴の背後に回り、緩やかにウェーブする髪をかき分け首を覗き込む。しかし、なかなか返事がない。

「……ないわよ？」

やがて、困惑した基山の声が届いた。

「え？」

「見あたらない。ホントについてたの？」

鈴は慌てて首を捻った。そんな事をしたところで、自分の首のうしろが見えるはずなんかないのに。

「え、でも、ついてるって言われたのに……」

「本村主任に言われたの？」

本村ではなく城崎が教えてくれたとは何故か言えず、鈴はぎこちなく、「まあね」と頷く。

「ふーん。だったら、元々たいした事なくて、入社するうちに消えちゃったんじゃない？私に比べたらマシよ。加藤の奴……絶対許さないんだから……」

基山の意識はふたたび加藤へ戻る。よっぽど腹を立てているらしく、会社のロビーを抜けても彼女は「どうしてくれよう」とつぶやいていた。

それを聞きながらも鈴の意識は城崎の事でいっぱいだ。

考えてみれば、本村が平日に目立つような場所にキスマークをつけるはずがない。もしつけたとしても、一緒に風呂に入った時点で気づいて教えてくれるだろうし、謝ってくれる。

そういうところは几帳面なのだ。

だったら何故、城崎はついてもいないキスマークをつけていると言ったのだろう。

(カマカケ……?)

ふとそんな言葉が浮かんだが、そんな事をする理由が思いつかない。

(何か勘違いしたのかな)

腑に落ちないが、それが一番妥当だろう。鈴は気持ちを切り替え、エレベーターに乗り込んだ。

「おはようございます、原田先輩」

「おはようー」

部署に入ると今年四月に入社し、鈴の部下になった後輩が仕事の指示を求めて歩み寄ってくる。

鈴が受け持つ高齢者教材は元々試験的な試みだったが、少しずつその認知度を高め、周囲からも評価を得るようになった。いずれは正式にチームを設立し、子ども教材に並ぶ新しい事業として展開していきたいというのが上の意向だ。

ほんの一年前、城崎とタッグを組み、試行錯誤していたのが懐かしく思える。城崎に怒られてばかりだった自分が今では後輩を指導する立場になっているのだから人生わからないものだ。

鈴は後輩を連れ、いつものように高齢者施設へ外回りに出かけた。

移動は車、運転は後輩がするのだが、お世辞にも運転が上手いとは言えず、何度かひ